

〔論文〕

ゾラ『獣人』における自由間接話法とポリフォニー

寺田光徳

Le discours indirect libre et la polyphonie dans *La bête humaine* de Zola**Mitsunori TERADA**

〔résumé〕

Ann Banfield, linguiste américaine dit dans son livre *Phrases sans paroles. Théorie du récit et du style indirect libre* que les sujets du DIL au texte littéraire sont linguistiquement autres que le narrateur et les personnages. Elle nous donne ainsi une assurance linguistique du DIL pour la polyphonie des textes littéraires.

Zola s'est efficacement servi des DIL dans *La bête humaine* et y représente les pensées intimes de personnages en contraste avec les paroles apparentes par les discours directs. Car *La bête humaine* est un roman de crime et force à beaucoup de personnages, qui sont assassins, juge d'instruction, jaloux et amoureux, les réflexions intimes et secrètes.

On peut y trouver aussi quelques d'autres occurrences remarquables de DIL, qui concernent une locomotive. Soit une occurrence: 《Qu'importaient les victimes que la machine écrasait en chemin! N'allait-elle pas quand même à l'avenir, insoucieuse de sang répandu?》 Il n'y a plus de personnages qui puissent trahir ces phrases. C'est alors la locomotive même qui y parle, parce que Zola a connu bien des fonctions du DIL et qu'il a pu là en être disponible de l'effet polyphonique.

mots-clefs : discours indirect libre, polyphonie, *La bête humaine*, Zola

はじめに

筆者は一昨年（2004年11月）藤原書店の「ゾラ・セクション」の企画で、ルーゴン＝マッカール叢書第17巻『獣人』を翻訳・出版する機会に恵まれた。その翻訳作業の過程でもっとも苦労したのは、研究書の翻訳の際にはほとんど出会ったことのない「自由間接話法」をどう訳すかということであった。もちろん自由間接話法だからといって律儀に間接話法や直接話法とはっきり

識別できるように訳す必要はない。しかし常日頃フランス語と向き合っていることから、日本語らしい訳文にすることとその訳文に原文の形をできるかぎり生かすこと、このふたつのほとんど背馳した希望を両立させようと願うのは、研究者としてわれわれが共有する根深い業のようなものである。

小説には一般的に語り手 (narrateur) と登場人物 (personnages) が存在する。一方の語り手が存在するのは、他方の登場人物の行動から感情そして彼らを取り巻く背景を伝えるためである。その語り手が登場人物の談話や思考を伝える方法に直接話法と間接話法がある。報告される登場人物の談話 (discours rapportés) を見ると、前者では語り手が登場人物の発言をそのまま引用し、後者では登場人物の談話をなぞったり、要約したりして伝達しようとする。したがって登場人物の談話を訳すに際して、たいていの場合翻訳者は当然ながら直接話法の場合は登場人物の立場から、間接話法の場合は語り手の立場から訳すことになる。そのことは原文のなかに話法に対応した時制や人称代名詞で明確に現れているので訳者が迷うことはない。

だがここで問題にしようとする自由間接話法では、いきなり報告された登場人物の談話の部分だけが、間接話法とほとんど同じ外観をまとって、しかも案内役を務める語り手を伴わないで出現するので、翻訳者はそれを間接話法と見誤る恐れがあるばかりか、その談話を直接話法のように登場人物の立場で訳すべきか、それとも間接話法のように語り手の立場で訳すべきかはたと迷い込むのである。この自由間接話法による登場人物の再現文は、後に詳述するが、登場人物と語り手双方の観点が渾然一体となって形成されているから、そこではだれが語っているのかという点が判然としないのだ。これが翻訳者の悩みの種なのである。

十九世紀というのはフランスの小説を筆頭に小説の形式面で目覚ましい発展があった時代である。こうした形式面での工夫はいうまでもなく話法にも及ぶ。作家の立場からすれば翻訳者の悩みの種である自由間接話法も、小説形式に対する果敢な挑戦の一端を指し示している。小説の形式的側面に対して飽くなき挑戦をしたフロベールがまた自由間接話法をかつてないほど多用した作家としてよく取り上げられるということは、フロベールが自由間接話法を小説のもつ新たな可能性を具体化する形式として考えていたことの証拠

にほかならない。このようにフロベールが着目した自由間接話法の可能性のひとつに現代の文学批評で言うところの、小説の語りのポリフォニー（多声性）があり、それはまた観点を換えればテキスト相関性の問題として捉えることもできる。

こうして見てくると、一方で自由間接話法は翻訳の際に誤訳の可能性をはらんでいることから、翻訳者にとっては旧来からの躓きの石としてある技術的問題のひとつと見なせる。しかし他方ではフロベールなどに始まる小説形式のあらたな可能性を問う言語装置として考えるなら、自由間接話法は現代の文学批評を一段と豊かにするための試金石となるかもしれない。翻訳の技術論のひとつとしてとりあげるとき、検討の俎上に載せたゾラの拙訳『獣人』がすでに公刊されているため、ここでの議論は筆者には遅きに失したという憾みがないわけではないが、今後のゾラ研究のためにも他方のポリフォニーという文学批評の新たな側面にできるだけ言及して、これから議論を進めていきたい。

I 自由間接話法の定義

I-1 直接話法と間接話法

自由間接話法（discours indirect libre, 以下DILと略記）に対して、たとえば朝倉は「直接話法と間接話法の間間的性質を持つ話法。間接話法に必要な接続詞（多くque）を略し、多くは導入動詞（dire, croire, penser, など）をも略して独立節の形を与え、間接話法と同じ人称・叙法・時制を用いたもの」⁽¹⁾と定義する。回りくどいかもしれないが、このようにDILにとって前提となっている、初級文法ではおなじみの直接話法（disucours direct, 以下DDと略記）と間接話法（disucours indirect, 以下DIと略記）について、その統辞的特徴を指摘することから議論を始めよう。

(1) DD : Jean m'a dit: 《Je partirai demain.》

(2) DI : Jean m'a dit qu'il partirait le lendemain.

(1)のDDは(2)のDIに書き換えられる。そのとき、報告対象の後半部分は

時制が「単純未来」から「条件法現在」に、人称代名詞が「一人称単数」の《Je》から「三人称単数」の《Il》に改められる。さらに時の副詞「明日 demain」は「翌日 le lendemain」に変えなければならない。

二つの話法を比較すると、このほかにも後半部の異同に関して異なる定義付けを与えられる。一方のDDでは、後半の《Je partirai demain.》が前半の《Jean m'a dit》から何らの影響も受けていない独立した文として取り出すことができるために、これは2つの文が並置されたものとみなすことが穏当だろう——「穏当だ」と留保をつけたのは、後半部を独立した文として取り出すと、前半の《Jean m'a dit》は直接目的語を欠いた不完全な文にとどまってしまうからである。これに対して、他方のDIでは、《que》に先立たれる従属節が動詞《a dit》の直接目的語として明確に定義づけられるので、前・後半部は一体となって完全文を構成している。

こうしたDDとDIの統辞関係の差異から、おもにモード（叙法）に由来する意味論的な差異が引き出される。

後半の報告文に焦点を絞ると、すでに述べたように、一方のDDではそれを独立文として取り出すことが出来ることから、導入部の話者（主節の主語）の観点とは明確に区別される、再現された話者（報告文の主語）の観点が存在する。他方DIでは、主節の話者の観点に基づいてすべてが統一され、緊密な関係をもった文として構成されているので、従属節の諸要素は人称、時制その他すべての点で主節の話者に支配される。そこからDDでは再現された話者の言表をそのままのかたちで語ること（dire）ないしは示すこと（montrer）が重要視されていると考えることができるが、それに対してDIではその内容を咀嚼して、説明し（commenter）、解釈しよう（interpréter）とする伝達者の意図が支配的だと見なされる。⁽²⁾ 同様に、前者で問われているのは形式で、後者は内容だとも言われる。⁽³⁾

I-2 自由間接話法

続いて問題のDILである。ゾラ『獣人』の一章でルボーが妻のセヴリーヌの到着を待ちわびている場面から例を引く。

(3) DIL [イタリック体の部分]

Devant le coucou qui marquait trois heures vingt, Roubaud eut un geste désespéré. *A quoi diable Séverine pouvait-elle s'attarder ainsi? Elle n'en sortait plus, lorsqu'elle était dans un magasin.* Pour tromper la faim qui lui labourait l'estomac, il eut l'idée de mettre la table.

[E. Zola, *La Bête humaine*, coll. folio, Gallimard, 1977, p.30]⁽⁴⁾

3時20分を告げる鳩時計の前で、ルボーはあきらめたという動作をした。ひどいなあセヴリーヌは、*何でこんなに遅いんだ。彼女の事だからいったん店に入ると、もう出てこないんだから。胃をえぐるような空腹感をこまかすために、彼はテーブルをセットしようと思った。*

このようにDILは、統辞論的観点からすれば、「伝達動詞」も、「接続詞」もないことによって特徴づけられ、そのことによって名称の上では「自由」の名を付して先のDIと区別される。⁽⁵⁾

しかしDIとDILの相異はそれだけにとどまらない。前者では時と場所の副詞である指示詞 (déictiques) が依拠する観点は主節の話者であるに対して、一般的に後者では再現文の話者のそれである点がもうひとつの大きな相異点である。それからDILでは直接話法の際の会話体の色濃い語順も許される。またゾラの『獣人』の一章にある例で具体的に示そう。妻の不倫が発覚したあと、夫のルボーがそれにどう決着をつけるか思い悩む場面である。このなかで時の副詞《maintenant》は、語り手 (narrateur) の観点と異なりルボーという再現された主体の属する「今」を直接指示している。

(4) DIL [イタリック体の部分]

Sans s'arrêter, il se tapa les tempes de ses deux poings, il bégaya d'une voix d'angoisse: *《Qu'est-ce que je vais faire?》*

Cette femme, puisqu'il ne l'avait pas tuée tout de suite, il ne la tuerait pas maintenant.

[E. Zola, p.53]

彼は歩みをとめずに、自分のこめかみを両の拳でたたくと、苦しい声で

口ごもって言った。

「どうしたらいいんだ？」

こんな女はひと思いに殺してしまえばよかったが、今となっては殺せそうもない。

たとえばこのDILの部分語り手の立場から書き直してみると、DDでは人称と時制の手直しが、DIでは《maintenant》の《alors》への書き直しと語順について若干の手直しが必要となるだろう。

(4)' DD : Il se dit: *《Cette femme, puisque je ne l'ai pas tuée tout de suite, je ne la tuerai pas maintenant.》*

(4)" DI : Il se dit qu'il ne tuerait pas cette femme alors, puisqu'il ne l'avait pas tuée tout de suite.

つまりDILはDIから前半の導入のための主節を落としたうえに、人称代名詞と時制については主節の主語の観点に合わせ、時間と場所についてはDDの場合に見られるような再現された文の経験的な環境に結びつけているのである。⁽⁶⁾ ここでDILによって表された再現文について、想定される主節の話者と再現された話者の関係を考え直してみると、一方のいわば隠れた話者は、人称と時制の面では自らの話者の立場を確保しながら、しかしそれと同時に自らの言表行為が行われているはずの時と場所から解放され、指示詞を介して再現された話者の属する環境に移行しているとも言える。そこで隠れた話者は、再現された話者の観点に基づいて臨場性を確保し、その経験内容を再体験しているのだ、と言ってよかろう。DILが「直接話法と間接話法の間際の性質を持つ話法」と言うときには、このような意味が含まれていると解釈しておきたい。

II 物語分析における自由間接話法

II-1 物語における自由間接話法

いま、報告された談話の引用者は、再現文であるDILで自らの立場を確保しながらそれと同時に談話の話者の視点に移行すると言ったが、その際の引

用者を私という一人称に、談話の話者を三人称に想定するなら、DILにおける一人称でかつ三人称であるようなこの言表行為の主体を言語学ではどのように定義づけられるであろうか。一、二、三人称以外の人称を想定するなら話は別だが、残念ながら言語学は現状ではそのような問いに対して納得できる答えをもたない。言語学が話法分析で対象とするのは何よりもコミュニケーションの言語活動であり、そこで言語は人称と時制が一体となった緊密な関係の上に構成されるという公理がある限り、それをすこしでも逸脱するような側面をもつDILについては言語学は現象の記述に甘んじるほかないし、通常のコミュニケーション分析では不問の大前提である人称の根源に触れるようなこの種の問題に対して等閑視せざるをえないであろう。

それに対して言語学者のバンフィールドがコミュニケーションとは別に文学テキストを定義づけることが可能だとし、上述したDILの特殊な側面を文学だけに許される現象として解明しようとしている——DILが文学テキストに固有な話法であるという主張から「自由間接文体 *Style Indirect Libre*」と呼ぶ研究者たちもいるが、ここでは伝統的な「自由間接話法」という呼称で統一した。そこでこの場の議論を単に翻訳の技術的な問題に切りつめるのではなく、文学批評にとっては有益なDILにおけるポリフォニーにかかわる理論的根拠を探るために、以下ではすこしバンフィールドの大胆な主張にそって考察をすすめよう。

とりあえず先に問題にした「DILにおける一人称でかつ三人称であるような言表行為の主体」をどう定義するかということから始める。それについてバンフィールドは次のように語っている。DILにおいては、

「語り手を一人称だとして」一人称は再現された話 (parole) や思考から排除されているのだから、再現された表現が暗黙の、「姿を控えた」語り手にも同時に帰属させられないのは明白である。したがってこの文体 (DIL) は物語をわれわれに語るだれかの意識の現れ (présentation) ではなく、だれの観点の仲介もない、物語の直接的な再現 (représentation) である。再現された表現の存在理由は話の再現を可能にすることであるにもかかわらず、自由間接話法の表現にはこうした話のない文章 (phrases *san parole*) の語り手

をどこにも見出せないのである。⁽⁷⁾

少々分かりにくい引用文だが、われわれが先に言った「DILにおける一人称でかつ三人称であるような言表行為の主体」に関して同じようなことを述べたものである。ただし彼女はそれを一歩進めて、語り手と再現された言表の話者を示す一人称も三人称もそこには不在だと主張する。これが新たなDIL定義への布石である。バンフィールドにとってはどのような話法による表現(1E)にもひとつの主体(1JE)とその言表行為が行われる時と場所に関する特定の指示環境(1PRÉSENT)があることが前提である。DILも一個の表現(1E)であるが、その時不在の主体は(SOI)と定義され、指示環境は、たとえば上述したゾラの例文(4)にもあるように、文法上の現在形が依拠する「現在」ではない不在の主体の依拠する「今」(MAINTENANT)とする。つまり普通の表現ではDDもDIも《1E/1JE-1PRESENT》だが、DILの方は《1E/1SOI-1MAINTENANT》と定義されるというわけである。

だがこのDILにおける《1SOI-1MAINTENANT》は実際の言語形式のうえではいうまでもなくDDやDIのそれと同一だから、後者から截然と形式的に区別できるものはもないし、先の引用で見たように《1JE-1PRESENT》がDILには不在だからその代わりにそれとは別の《1SOI-1MAINTENANT》が論理的に当然想定できるはずだ、というネガティブな定義にすぎない。そこでバンフィールドは物語を形式的に規定する三人称と単純過去の緊密な関係というバンヴェニストの主張を引いて、一部修正しながら——文学テキストでは一人称における単純過去の使用例があるから——、それをさらに推し進める。すなわちバンヴェニストの物語の単純過去は過去を表す時制のひとつとしてDDやDIに現れるに対して、DILではその単純過去が登場せず、過去を表す役割を半過去(とその複合形の大過去)に譲り渡す、したがって文学テキストにおいては半過去こそがポジティブにDILの特殊性を規定する形式的要素だというのである。⁽⁸⁾

こうして文学テキストにおける半過去の機能をとおして、語り手と登場人物とは別の新たな言表行為のレベルの存在を確認したうえで、バンフィールドはわれわれにとっては有益な文学テキストのポリフォニー関するDILの効

用をのべる。そのひとつは、DILでは語り手の文法的拘束を離れるため、自由に視点の移動が可能になる。⁽⁹⁾ さらに物語の単純過去は単に出来事を報告するだけであるに対して、半過去はDILの想定する《SOI》という主体の意識を通してその出来事を再現する⁽¹⁰⁾。つまり前者に対して、DIL中の後者は主観性、迫真性、臨場性を確保できることになる。

II-2 「自由間接話法で語るのはだれか」

さて議論の核心に移ろう。バンフィールドの言うDILの主体として想定された《SOI》とは何か？ これこそわれわれが当初「自由間接話法で語るのはだれか」と問いかけをしたときから待ち望んでいた解答である。バンフィールドはこの《SOI》という存在の問題に踏み込んで、ただしかなり及び腰ではあるが、もしも文学テキスト中に語り手でも、登場人物でもない主体をあえて措定するとなれば、「作者」しかないと言う。⁽¹¹⁾ ジュネットのナラトロジーでは語り手と登場人物に対して作者はテキスト外へと排除され、物語分析中で何ら実質的役割を与えられていないが、それでも新たに語り手と登場人物以外にDIL中で《SOI》を担えるような信憑性をもった主体を探そうとすればこの作者しか見当たらないからである。ただしここでまたテキスト中でのみ存在を許された作者の代弁者たる語り手と今までテキスト外に排除されていたからこそ語り手にそのような定義づけを許していた作者の関係が改めて問題になる。バンフィールドは一方で語り手や作中人物を記憶における反省的な意識の産物と同一視し、他方で問題の作者は非反省的な意識が再現されたものと見なす。⁽¹²⁾ また彼女の言うことは幾分循環論法気味ではあるが、非反省的な主体のなす言表行為であるからこそ、DIL中の作者は語り手や作中人物と截然と区別できないし、またそのような意味でよく言われるように「テキスト内への侵入者」として位置づけできることになる。⁽¹³⁾

DIL中の主体がポジティブに作者と規定できるかどうかここでは棚上げするとしても、バンフィールドの主張は「自由間接話法で語るのはだれか」というわれわれの当初からの問いに対してすくなく説得性があるので、DILに語り手や作中人物とは別の主体を措定したほうがよさそうだし、そうすることが可能だろう。それに文学テキストに一人称（語り手）とも三人称

(登場人物)とも異なった言表行為の主体を認めるのはバンフィールドだけではない。日本文学における物語理論を追及する藤井貞和もまたフランス語のDILに匹敵する「心内文」に「物語人称」としての「四人称」という主体を見ている。⁽¹⁴⁾ 証言者の数が多いことがそのまま存在証明の代わりになるということではない。だがそれにしても、DILにおける言表行為の主体をジュネットのナラトロジーが認めてきた語り手と登場人物のどちらかに限定しようとするのではなく、バンフィールドや藤井が主張するように、それを担っているのは語り手や登場人物とは別の「作者」や「四人称」と名付けられる存在だと見なした方が、どうやら文学批評におけるポリフォニー分析にとっても、また翻訳の際の自由な訳文作りのためにも有益となるようだ。

Ⅱ-3 ポリフォニーの可能性

語り手や登場人物と異なる「作者」がDILにおける言表行為の主体だという、バンフィールドの主張を翻訳という現場におおしてみると、すこし趣が変わってくる。

フランス語翻訳に関するバイブルのような驚見洋一『翻訳仏文法』から例を取ろう。

(5) DIL [イタリック体の部分]

Je montai dans ma voiture. *Que ferais-je si elle ne démarrait pas?* (R. Belletto, *L'Enfer*)

私は車に乗った。*動かなかったらどうしよう。*⁽¹⁵⁾

これは一人称で書かれたDILの例であるが、ここでバンフィールドの主張を当てはめて解釈すれば、「私」という語り手が単純過去で《PRÉSENT》の視座から語るのとは別に、DILで条件法現在と半過去を通して語る主体の「私」は過去の《MAINTENANT》という視座に立っている、つまりここには現在の私と過去の私があるのだというふうに説明できる。しかし、このようにごく常識的に現在の私と過去の私とで言い換えできるなら、バンフィールドが同一の言表行為の主体が同時に現在にも過去にも立つことができない、

したがってDILの主体は、語り手の「私」とは異なるたとえば「作者」をもってこざるをえないという言語学的要請にのっとった主張は、語り手も登場人物も同一人称の場合にはあまり問題にならないようだ。しかもバンフィールドの主張に律儀にしたがってDILのなかに語り手とは別の主体を何らかの形で無理矢理定立しようとする、訳文は混乱を来すだろう。それについては物語理論の立場から藤井の主張する「四人称」についても同じことである。そこで上記の例について、原文にできるだけ即して訳すとしても、「車が動かなかつたら私はどうしようか？」というふうに、別の主体をたてるより同じ「私」を利用するほうがよほど増しであろう。

とは言っても、ここまで見てきたバンフィールドの主張が、もちろん、まったく机上の空論だというわけではない。上述の例のような「現在の私」と「過去の私」との分化・定立のメカニズムを通して、DILのもつ語り手と異なる別の主体の存在する可能性が見えてくる。これこそがDILという話法形式によって保証された、紛れもない文学テキストのポリフォニーということになるだろう。

ここでもう一度前に戻って、DDとDIに対してこのようなポリフォニーを許すDILがどのようなものか再確認を行っておこう。よく言われるように、DDは他者のことばをそのまま引用するので他者性とその完全な再現を目指し、DIは他者のことばを引用者の完全な支配下に置くので言表の一体（一者）性を強調する。そこで、登場人物を重視したDD、語り手を重視したDIという、それぞれの機能に応じた話法が用意される。これに対して、DILでは陰に隠れた語り手の存在を多少とも（時制の面で）感知させながらも、再現された登場人物が主体として自律的に機能している、あるいはことばを変えて、隠れた語り手が再現された話者の立場に立ってその体験を追体験している、とこれまでのところで定義できるようにしても、DDとDIにDILという新たな話法をさらに導入して、どのような利点が生じるのか、どのような新たな地平が切り開かれるのかということが次に問われなければならないだろう。

DILが意識的で反省的な言語の拘束から免れているので——バンフィールドはDILに特徴的な半過去が隠れた引用者の課してくる拘束であるどころか、それと反対にそれからの自由の保証であると見なす——、たとえばそこでは

非反省的な意識を表現するのに適しているとすでにバンフィールドが言っていた。⁽¹²⁾ しかしここでは非反省的な意識というような抽象論によって論議するよりも、具体的な文学テキストの実例を通してDILの切り開いた地平やポリフォニーの実態を検討してみよう。もちろん対象は当初から言ってきたゾラの『獣人』である。

Ⅲ ゾラの自由間接話法

Ⅲ-1 『居酒屋』における自由間接話法

ゾラの全作品やルーゴンマッカール叢書全体を対象にしたDIL研究は残念ながら存在しない。またゾラのDILに関するモノグラフィーとして筆者が見出したのはロバート・J・ニースの『『居酒屋』の自由間接文体に関する考察』だけであった。最初にこのニースの論文によって、ゾラにおけるDIL使用の具体像をつかんでおこう。

ニースは当の論文のなかで、1)『居酒屋』におけるDILが主人公たちの住むグット・ドールという労働者街のことばを多用することによって、それまで文学作品では聴かれもしなかった会話や表現されもしなかった考え方を見せてくれるが、2)しかし「味わい深い文、予期しない言葉、びっくりする、おもしろい名称」をそのまま用いることで、語り手（ないし作者）の内省を披瀝する代わりに、登場人物に対する語り手の皮肉や彼らと語り手の距離を感じとらせるようにし向けている、と指摘している。⁽¹⁶⁾

なぜこのようなかたちでゾラがDILを大いに利用したかについて、ニースは文学史的な理由を挙げる。自然主義や写実主義の作家たちにとっては、彼らの意図を代弁する小説中の語り手はバルザック的な万能の創造者としてでなく、冷静な観察者として登場するために、登場人物の内面を描写することが困難になる。DDによって登場人物の発する特異なことばを表現できても、またDIによって彼らの言動を説明できても、これら二つの話法だけでは彼らの内面を生き生きと伝えることは不可能である。そこでDILの特徴である「臨場性を確保することによって、再現された話者の経験内容を再体験して」、登場人物の内面を活写し、自然主義や写実主義に必然的に伴う表現上の困難さを克服したというのである。⁽¹⁷⁾

なるほど『居酒屋』には俗語や隠語が多い。したがってニースの主張も納得がいく。しかしゾラの作品に見るDILがすべて『居酒屋』のような利用のされ方をしているわけではない。『獣人』は鉄道という労働者の世界を舞台にしているのだが、俗語や隠語の類はほとんど使用されていない。にもかかわらずDILの利用は『獣人』でも『居酒屋』に引けを取らない。それゆえに『獣人』においてDILがどのような特徴のある利用のされ方をしているかが次の議論的になる。

Ⅲ－２ 自由間接話法の分類

ところでDILと一口に言っても、もちろんそれは多様な形態のもとに出現してくる。そこでたとえば対象とする文がDILであることを明示するような形式的指標にしたがって分類することができるだろう。その場合まず取り上げられるのは〈半過去－大過去－条件法現在－条件法過去〉という、DIの従属節にも利用される、DILの根幹をなす動詞時制の体系である。こうした形式的指標の場合の分類には、動詞時制でDIの従属節でのように表現されながらも、変化を蒙らない時と場所の副詞（ゾラの場合のように変化している例もある）、語り手の主観を伝える、英文法で言うところの「合接詞」（*en outre, ainsi*など）、「離接詞」（*certes, bien sûr*など）の類、DDの表現をそのまま移したような疑問文、感嘆文、それらに付属する疑問符、感嘆符の使用、その他ドゥー・ポワン（*:*）を中心とする句読記号なども加わる。⁽¹⁸⁾ DILかどうか見分けることが翻訳の勘所のひとつである、と当初述べたことからすれば、こうした分類は翻訳の技術的側面からすればまことに貴重である。しかしここではDILがゾラの『獣人』ではどのように利用されているか、またそこでポリフォニーのようなナラトロロジー的概念がどのように具体化されているかを検討するために、概括的だが、先を見越して、機能的な側面から見た分類を採用したい。

前節のニースの検討からすれば、ゾラの『居酒屋』のDILはDDとDIの不足を補うように機能していた。したがって『獣人』でも、登場人物の発するDDでの発言を受け継いでその不足を補ったり、それを端折って表したり、またDDでは表しえない彼らの思考を表すためにDILが利用されている、と

当然予想される。このようなDILの分類法を考えるなら、まずおおざっぱな、一般的な分類にしたがって、登場人物の発言内容を表す場合、思考内容を表す場合に大別できるだろう。⁽¹⁹⁾

思考内容を表す場合の『獣人』の例は、すでに(3)、(4)の文例などで見てきた。ここでは発言内容の例を掲げておこう。ただし、こうした発言内容を表すDILでは、大部分の場合、登場人物の発した言葉をそのまま写しているというよりも、その内容を要領よくまとめたものだとみなせる。

(6) [イタリック体がDIL]

Elle [Phasie] s'enfiévrant d'une rancune sourde et peureuse, elle vidait son cœur, ravie de tenir enfin quelqu'un qui l'écoutait. *Où avait-elle eu la tête de se remarier avec un sournois pareil [Misard], et sans le sou, et avare, elle plus âgée de cinq ans, ayant deux filles, l'une de six ans, l'autre de huit ans déjà? Voici dix années bientôt qu'elle avait fait ce beau coup, et pas une heure ne s'était écoulée sans qu'elle en eût le repentir: [...]* Lui, était un ancien poseur de la voie, qui, maintenant, gagnait douze cents francs comme stationnaire; elle, dès le début, avait eu cinquante francs pour la barrière, dont Flore aujourd'hui se trouvait chargée; [...] [E. Zola, p.67-68]

彼女 [ファジー] は内にこもったおびえからくる恨みで、熱に浮かされていた。とうとう彼女の言うことに耳を傾けてくれる者を見つけて有頂天になっていたので、自分の胸の内をぶちまけるのだった。彼女のほうが五歳も年上で、それも六歳と八歳の二人の娘がいたのに、あんな陰険な一文無しでけちなやつ [ミザール] と再婚するなんて、頭がどうかしてたんだ。こんなへまをしでかしてからかれこれもう十年になるけど、そのことを悔やまなかったことはひとときもなかった。[……] 夫ははじめ線路工夫だったけど、現在電信係として1200フラン稼いでる。彼女は最初遮断機の開閉で50フランもらったが、今ではフロールがそれを受け持つようになった。[……]。

Ⅲ-3 『獣人』における自由間接話法の実例

文学テキストではDILを見つけがたいと先に言ったのだが、それはDILが常に明確な形で現れてくるわけではないからである。多くの例で見られるようにそれは小説の語りの中で、DDとDIの連続に紛れて出現する。今まで掲げた例からも分かるように、同一の文中に二つ以上の話法が混在して出現するときには、それがはたしてDILかDIの続きなのか見分けるのに困難を極める。このようにどちらともとれる曖昧な例も含めて、『居酒屋』では「50パーセント余りのページが自由間接文体であることを示す標識を含んでいる。」⁽²⁰⁾ この割合は『獣人』でも45パーセントにのぼるので、両作品については数の上での大差はない。ただし『獣人』の数字をもう少し詳しく見てみると、章に応じてかなりのばらつきがある。短いものは感嘆詞だけというものから、ページ全体にわたるものまで、ページによって様々であるが、大まかな数字だけでも指標の役割を果たしうると思われるので、40パーセントを超える章を挙げ、そこにDILがどのような場面で利用されているのかを記すとともに、その実例を付しておこう。

Ⅱ章 [50%]: DILの利用は大半がジャックの思考内容に関するものである。それは彼がフロールに突如襲いかかり、その後こうした自らの病気の因って来たところを考えあぐねる場面で使用されている。

(7) [イタリック体がDIL]

Alors, Jacques, les jambes brisées, tomba au bord de la ligne, et il éclata en sanglots convulsifs, vautre sur le ventre, la face enfoncée dans l'herbe. *Mon Dieu! il était donc revenu, ce mal abominable dont il se croyait guéri? Voilà qu'il avait voulu la tuer, cette fille! Tuer une femme, tuer une femme!* cela sonnait à ses oreilles, du fond de sa jeunesse, avec la fièvre grandissante, affolante du désir. [E. Zola, p.84]

そこでジャックは足がくたくたになって線路脇に倒れこんだ。腹這いになって、顔を草のなかに埋めると引きつるようなすすり泣きを発作的に始めた。何てことだ！ また繰り返した。自分では治ったと思ったあの忌まわしい病気が！ あの娘を殺そうとしたじゃないか！ 女を殺せ、女を殺

ぜ、そういう声が、かつての青春時代の奥底からよみがえってきて、欲望でますます熱を帯び、たけり狂って彼の耳元でうなっていた。

Ⅳ章 [43%]: この章ではドゥニゼがグランモラン裁判長の殺人事件に関して予審訊問をする。その場面にふさわしく判事の方は何とか真犯人を見いだそうと疑わしい人物に対して駆け引きを弄して訊問を発し、その間に頭のなかでは盛んに推論をしている。他方ルボーとセヴリーヌの夫婦は真犯人だと見破られることを恐れているので、相手の質問や自らの発言に対して、これまた盛んに心中で思いを凝らす。語り手の状況描写をはさんで、登場人物たちのDDでの表向きの発言、そしてその裏で盛んに繰り返されるDILによる推論という、対照的な話法の利用が際立つ。

(8) [イタリック体がDIL]

[...] il[Denizet] sentit, à cette minute, que la vérité passait dans l'air. Sa confiance en la piste Cabuche en fut même ébranlée. *Est-ce que les Lachesnaye auraient eu raison? Est-ce que les coupables, contre toute vraisemblance, seraient cet employé honnête et sa jeune femme, si douce?* [E. Zola, p.155]

彼はその瞬間真実がこの場を通り過ぎていくのを感じた。カビューシュの線に託していた確信すら、それで揺らいできた。ラシェネー夫妻のいうことが正しかったのだろうか? 犯人は、まったくありそうもないことだが、この律儀な社員と大変やさしそうな若妻だろうか?

Ⅴ章 [49%]: ルボーの妻セヴリーヌは、事件の真犯人であることが発覚するのを恐れて、最初に事件の訴追についての最終責任者であるカミー＝ラモット氏と会見し、捜査がどこまで進んでいるか探り出そうとする。続いて彼女は事件の唯一の証人であるジャックの口封じをねらって彼を誘惑する。セヴリーヌは常に裏に真の意図を隠しながら表向きの発言をしているので、先のⅣ章と同じくDDによる発言内容とDILによる思考内容の対照が話法の交替でたくみに表現されている。これはセヴリーヌの意図に気づいて彼女と応対するジャックとカミー＝ラモットの両名についても同じである。またカミー＝ラモットは政府の置かれた立場も勘案して事を進めようとするので、

事件の真相の究明のみに突き進む予審判事ドゥニゼにも、発言と思考で表裏を異にして面会する。このときもちろんDILが陰の思考を表すために利用される。

(9) [イタリック体がDIL]

Et il[Camy-Lamotte] poussa devant elle[Séverine] un petit guéridon, en cessant de la regarder, pour ne point l'effrayer trop. Elle avait frémi: *il voulait une page de son écriture, afin de la comparer à la lettre*. Un instant, elle chercha désespérément un prétexte, résolue à ne pas écrire. Puis, elle réfléchit: *à quoi bon? puisqu'il savait. On aurait toujours quelques lignes d'elle*. Sans aucun trouble apparent, de l'air le plus simple du monde, elle écrivit ce qu'il demandait; [E. Zola, p.176]

彼は小さな丸テーブルを彼女の前に押しだし、あまり恐れを抱かせないようにと彼女を見つめるのをやめた。彼女は震えてしまった。この人は手紙の筆跡とを比べるために、自分の書いたものが欲しいのだ。一瞬彼女は断固書くことをよそうと、絶望的になって口実を探した。それから思い直した。そんなことをしてなんの役に立とう？ 彼は知っているではないか。その気になれば、いつだって数行の書いたものなど入手できる。表面にはどんな迷いも示さず、この上なくあっさりと、彼女は求められたものを書いた。

Ⅶ章 [47%]: この章はリゾン号の雪による遭難を扱っている。もちろんこれまでと同じように会話内容や思考内容を表すDILが登場しているが、大半は短いもので特別に付言を要しない平凡な例がほとんどである。長い例では、フロールがジャックとセヴリーヌの抱き合う現場を目撃して、内心で嫉妬に燃える場面が目立つ程度である [E. Zola, p.271-272]。これまでの章と多少趣の変わった例を挙げるとすれば、リゾン号の乗務員や乗客という多数からなる集団の声を反映している例が散見される点だろう [E. Zola, pp.258,261, 264 et 275]。

(10) [イタリック体がDIL]

[...] le mécanicien sifflait éperdument, à coups pressés, le sifflet haletant et

lugubre de la détresse. *Mais la neige assourdissait l'air, le son se perdait, ne devait pas même arriver à Barentin. Que faire? Ils n'étaient que quatre, jamais ils ne déblaieraient de pareils amas. Il aurait fallu toute une équipe. La nécessité s'imposait de courir chercher du secours. Et le pis était que la panique se déclarait de nouveau parmi les voyageurs.* [E. Zola, p.258]

機関士は狂ったようにせわしい連続音を響かせて汽笛をならした。それは暗く悲痛で息切れしそうな非常信号だった。しかし雪がアリアのような響きを消し、音は紛れてしまうから、バランタンまで届くはずはない。どうしよう？ 四人しかいないから、こんな大量の除雪は絶対無理だ。除雪用に作業チームを編成しておけばよかった。助けを呼ぶことがぜひとも必要だ。また悪いことに旅客の間にパニックがふたたびもちあがり始めている。

IX章 [58%]: ジャックは自分の情人セヴリーヌから唆され、彼女の夫ルボーを殺害しようと謀る。ジャックとセヴリーヌの両名はなぜルボーを殺さなければならないか、試行錯誤しながらそれぞれ殺人の論理を組み立てようと努める。『獣人』におけるDILの最長の例が、渦巻く思いに興奮で眠りを妨げながらジャックが殺人を考察する場面で展開されている [E. Zola, pp. 336-339]。その一部からの引用。

(11) [イタリック体がDIL]

Mais Jacques, dont le dos brûlait, et qui s'était mis sur le ventre, se retourna d'un bond, dans le sursaut d'une pensée, vague jusque-là, brusquement si aiguë, qu'il l'avait sentie comme une pointe, en son crâne. *Lui, qui dès l'enfance, voulait tuer, qui était ravagé jusqu'à la torture par l'horreur de cette idée fixe, pourquoi donc ne tuait-il pas Roubaud? [...]* [E. Zola, p.337]

ところでジャックは、背中が熱くなって腹這いになっていたのだが、はっとしてまた体を反転させた。それまで漠然としていた考えがふいにはっきりしだして、頭をピンで突き刺されるように感じたから、それでびっくりしたのだ。子供の時から人殺しをしようと思っていた。この固定観念に對する恐れにさいなまれてきたのだから、どうしてもルボーを殺さないではすまないだろう。

X章 [72%]: ミザールはファジーのへそくりを発見しようとそのありかをあれこれ考え、フロールは嫉妬で胸をこがしながらひとともにジャックの運転するリゾン号を転覆させようとその方法に知恵を絞る。彼女は最終的にリゾン号を転覆させられたにもかかわらず、肝心のセヴリーヌとジャックの命は奪えなかったので自ら死を選ぶのだが、その時の胸の中にわき起こるさまざまな思いや自殺を最終的に決断・実行するにいたるまでにその思考は揺れ動く。またこの章には、愛するリゾン号の最期を目の前に、トリオの一角の死を悲しむ機関助士のペクーと機関士ジャックの哀悼の思いも出てくる。DILはこうした彼らの心中における思考の様子や感情の叫びを描き出すのに最適な話法となっており、そのために『獣人』中ではDILの頻度が最高値を示している。

(12) [イタリックがDIL]

C'en fut trop pour Pecqueux, qui était resté là, immobile, la gorge serrée. Leur bonne amie mourait, et voilà que son mécanicien voulait la suivre. c'était donc fini, leur ménage à trois? Finis, les voyages, où, montés sur son dos, ils faisaient des cent lieues, sans échanger une parole, s'entendant quand même si bien tous les trois, qu'ils n'avaient pas besoin de faire un signe pour se comprendre! Ah! la pauvre Lison, si douce dans sa force, si belle quand elle luisait au soleil! [E. Zola, p.378]

それまでそばにじっと立って胸を痛めていたペクーにとっては、それで十分すぎるほどだった。仲の良かったラ・リゾンが死にかけている。それで機関士の彼もその後を追いたいのだ。これで自分たちのトリオもおしまいだ。二人で彼女の背に乗って何千キロもの道のりを一言も交わさずに走った、あの旅もおしまいだ。三人ともとても気心が通じ合ってたから、理解するにも合図ひとつ要らなかった! ああ、かわいそうなリゾン、何てやさしく、力持ちで、何て美しく太陽に光り輝いていたことか!

XI章 [48%]: ジャックは怪我の療養の最後の日に、愛するセヴリーヌを持病の精神の病から発作的に殺害する。ここでもまたジャックが一人病床でめぐらす思いや、セヴリーヌ殺害で心中に溢れる感情を描写する役割がDIL

に与えられている。

(13) [イタリックがDIL]

Enfin, enfin! il s'était donc contenté, il avait tué! Oui, il avait fait ça. Une joie effrénée, une jouissance énorme le soulevait, dans la pleine satisfaction de l'éternel désir. Il en éprouvait une surprise d'orgueil, un grandissement de sa souveraineté de mâle. [E. Zola, p.418]

ついに、ついにやった！これで満足だ、女を殺したんだから！ そうだ、やれたんだ。彼は猛烈な喜びに、途方もない歓喜に興奮し、永遠の欲望の完全な充足感を味わった。誇らしい驚きを覚え、男の優越感が膨らむのを感じ取っていた。

XII 章 [55%]: セヴリーヌ殺害事件は予審判事ドゥニゼの大胆な、ただし過った推理から十八カ月前のグランモラン裁判長事件と結びつけられ、ルボーとカビューシュが両殺人事件の被疑者として罪に問われる。IV・V章のときと同じくドゥニゼや被疑者、それにドゥニゼの上司のカミー＝ラモットの思考内容がDILの主たる対象となる。また彼らを含めて事件の関係者や裁判を見守るルーアン市民の会話もDILによって伝えられる。

ところでこの『獣人』では最後を締めくくる機関士のジャックたちを振り落として暴走する列車の印象的な描写が話題になった。そこには見方によってはDILと見なせる文章が見出せる。それがDILだとすれば、そこで語り手が伝えようとしているのはだれの声なのか？ 写実主義や自然主義の作品の語り手が冷静な第三者たる観察者としてしか作中に登場しないことを前提にするなら、ここで登場人物のように主観的判断を交えて暴走する列車を描写しているのは作者以外にないのではなかろうか？ それともすでに発言や思考をする登場人物が姿を消したのだから、彼らに代わって機関車自らがその思いを語っているのだろうか？

(14) [イタリックがDIL]

Qu'importaient les victimes que la machine écrasait en chemin! N'allait-elle pas quand même à l'avenir, insoucieuse de sang répandu? Sans conducteur, au milieu des ténèbres, en bête aveugle et sourde qu'on aurait lâchée parmi la mort,

elle roulait, elle roulait, chargée de cette chair à canon, de ces soldats, déjà hébétés de fatigue, et ivres, qui chantaient. [E. Zola, p.461-462]

機関車が途中で犠牲者を出したところで何であろう！ 血が飛び散ることなど気にもかけずに、機関車はなおも未来に向かって走っていくではないか！ 運転士のいない機関車は、まるで死のなかに放たれた、眼も見えず、耳も聞こえない獣のように、闇のなかをただひたすら先へと進んでいた。積み荷の肉弾兵たちは、すでに疲労でぼーっとなり、酔っぱらって、歌を歌い続けていた。

その他の章におけるDILも登場人物の発言や思考を表して、ここで見てきた八つの章の例と担う役割に特別なちがいはない。ただし最後に気になる文例をもうひとつX章の最後から挙げておこう。これは直前に見たものと同じで、発言や思考をする登場人物がどこにも見当たらないが、それでもDILを介してまるで列車が発言か思考をしているように見える例である。

(15) [イタリックがDIL]

Ils [les trains] passaient inexorables, avec leur toute-puissance mécanique, indifférents, ignorants de ces drames et de ces crimes. *Q'importaient les inconnus de la foule tombés en route, écrasés sous les roues!* On avait emporté les morts, lavé le sang, et l'on repartait pour là-bas, à l'avenir. [E. Zola, p.387]

機械の全能性を示しながら、こうした葛藤や犯罪には無視を決め込み、列車は無関心に、無情に走り抜けていった。見知らぬ人々が途中で倒れ、車輪の下で轢き殺されるのがどうしたというのだ！ 死体は片づけられ、血は洗い流された。そして彼方に向かって、未来に向かって、人々はふたたび出発していった。

登場人物のジャックとベクーは、鉄道での生活をともにするトリオの一員として、機関車のラ・リゾンを擬人化までしてそれに対する愛着を表していた。彼らと同じようにここでの語り手もまた、機関車を擬人化して他の登場人物とまったく同じようにそれに発言を許しているかのようだ。ロバート・J・ニースは『居酒屋』ではグット・ドール街の住民たちの「下層のことは」

が語り手にも影響して、「文体の汚染」と呼べるような影響を及ぼしている
と指摘する。⁽²¹⁾ もちろんそのような無意識的な力も働いていたであろうが、
機関車が全編に躍動するこの『獣人』の場合には、ゾラはもっと積極的にD
ILのもたらす効果を計算し、リアリズムの語りにおいて許される限界までもっ
ていって、もの言わぬ機関車にそれとなく語らせたのだと言うこともできよ
う。だとすれば、ゾラは『獣人』の機関車が比喩的なレベルにとどまらずに、
話法のレベルから他の登場人物たちと実質的に対等の立場にあって発言をし
ているとそれとなく読者に暗示したのであり、またそれは観点を変えれば数
少ない例によってゾラがかいま見せてくれた、ポリフォニーに関するDILの
可能性の新たな一面だと言えるのである。

結び——『獣人』の自由間接話法

さてポリフォニーの問題は別にして、最後にDILが『獣人』のなかで全体
としてどのような特徴ある使用のされ方をしていたのかを振り返って小論を
締めくくろう。

DILの基本的な分類にしたがって語れば、『獣人』のDILは、DDで直接表
現するにはおよばない登場人物の会話の要点を簡略的に伝えたり、またDD
では原理的に語りえない、かといって語り手の第三者的なことばであるDI
によって伝えようとすれば無理がある、登場人物の感情的な思考や心中の葛
藤を臨場性豊かに表現している。つまり『獣人』のDILはDDとDIという二
つの話法だけではどうしても達成されない弱点を補うために利用されており、
その意味では一般的だが、しかし有機的で、意味のある使用のされ方をして
いるということができる。

また『獣人』のDILはロバート・J・ニースの研究が示した『居酒屋』の
利用のされ方と明らかに異なっている。『居酒屋』にはたしかに俗語、隠語
の類が頻出するが、同じ労働者の世界を扱いながら、『獣人』ではこうした
語彙が極端に少ない。ニースの言うように前者の作品でグット・ドール街の
下町ことばを小説世界に導き入れることで、DILがその住人たちのことば
や思考の実像を批判的に表現しえたと認められるにしても、『獣人』ではこ
うした主張は通用しない。それでは『獣人』におけるDILの特徴はどこにあ

るのだろうか。

『獣人』は殺人犯罪とその裁判を主題にした小説であった。作中ではどの章にあっても犯罪をめぐる登場人物たちが表向きの発言とは別にさまざまに心中で考えをめくらしていた。それは小説の枠組みとなったグランモラン裁判長、セヴリーヌの二つの殺人事件に限らない。妻ファジーを毒殺しようと図るミザール、嫉妬から列車を転覆してまでジャックとセヴリーヌを殺害しようとしたフロール、ジャックを機関車上で葬り去ろうとしたペクーと、ほかにも殺人の話題が小説中に散らばる。それらに予審や裁判の際の尋問の駆け引きが加わる。そこで彼ら登場人物たちは、口外できない意図をめぐる、あるいは罪を逃れるために、また逆に罪を暴くために、相手に気づかれないように胸中で必死に思考を凝らす。ここにまさしく『獣人』におけるDILの特徴的な利用法が効果を発揮する。Ⅲ-3で実例を検討してきたように、DDによって伝えられる登場人物たちの表向きの、偽りの発言とは裏腹に、彼らの密かに繰り広げる思考の内容こそDILで伝達するには打ってつけではなかったか。表の発言と裏の思考をDDとDILによって分けて伝えること、その意味では二つの話法はともに登場人物の緊迫感を伝え、臨場性に満ちて、DIというもうひとつの話法では不可能な役割を受け持っている。そのうえDDで表される表向きの人格とは異なるもうひとつの影の人格を、つまりバンフィールドのDIL分析の際に話題にした別個の言表主体を示すのに最適な言語装置としてDILが利用されているとすれば、ゾラはDDとDIによる表現上の弱点を補うだけにとどまらずに、説話法上の利点も知り抜いて、DILをこの上なく巧妙に利用し尽くしたと行うことができよう。

注記

(1) 朝倉季雄『新フランス文法辞典』白水社、p.176

(2) たとえば、Ann Banfield, *Phrases sans parole. Théorie du récit et du style indirect libre*, 1982, traduit par C. Veken, Seuil, 1995, p.74 [原著: *Unspeakable Sentences. Narration and Representation in the Language of Fiction*, Routledge & Kegan Paul, 1982]

(3) *Ibid.*, p. 112 et passim.

(4) 以下、本書からの引用は、作品名と引用ページのみ記す。訳文は以下も同じく藤原書店版の拙訳を用いたが、小論の主旨にしたがって多少の変更を加えた。

(5) 話は少々脱線するが、話法に関してはこれ以上ないのだろうか。つまり、DIだけに「自由」があって、DDには「自由」はないのかということである。一般的にフランス語における話法の分類ではDDとDI、それに今述べたDILの三種が挙げられるだけである。もちろん理論的にはDILと同様に、(1)のDDの例から考えて、前半の伝達節を持たない「自由直接話法」(以下DDLと略記)は可能である。なぜならDILのときの定義のように、導入のための節を欠いた「独立節と同様の体裁を取っている」文を想定することができるからだ。二十世紀には十九世紀以上に小説の表現法に対して様々な形の試みがなされ、それはDDLについても例外ではない。以下はDDLの例である。

[下線部がDDL]

Il répète que c'est tout à fait extraordinaire de la voir sur ce bac. Si tôt le matin, une jeune fille belle comme elle l'est, vous ne vous rendez pas compte, c'est très inattendu, une jeune fille blanche dans un car indigène. [M. Duras, *L'Amant*, Minuit, 1984]

男は、この渡し船で彼女に逢うのはまったく不思議だと繰り返す。こんなに朝早く彼女のように美しい娘に会うなんて、あなたはお判りにならないでしょうが、実に以外なんです、原住民用のバスに白人の娘さんが乗っているなんて。

ちなみにゾラの『獣人』に見られる興味深い例も挙げておこう。書記記号としての引用符がある上で上述のデュラスの例に比べると不完全ではあるが、これもDDLの一種とみなしてよい。

[下線部がDDL、イタリック体がDILを示す]

«Viens donc, nom de Dieu! notre compartiment est vide, nous y retournons.» *Vide, notre compartiment, il y était donc allé? La femme en noir, celle qui ne parlait pas, qu'on ne voyait pas, était-il bien certain qu'elle ne fût pas restée dans un coin?... "Veux-tu venir, ou je te fous sur la voie comme l'autre!" Il était remonté, il me poussait, brutal, fou.[...]*

[*La Bête humaine*, p.50]

「『さあ、来いしたら! おれたちの車室にはだれもいないから、もどるんだ。』だれもいない、わたしたちの車室だって、じゃあこの人あそこまで行って来たのかしら? 黒い服を着て、すこしも口を開かない、顔のわからない女の人が、たしか片隅にいたんじゃないなかったかしら?... 『早く来ないか、さもないとあいつと同じようにおまえも線路に突き落とすぞ!』夫はもう一度上がってきて、狂ったように、乱暴にわたしを押し当てた。」

この場面でゾラはおそらく、セヴリーヌの息せき切って告白するさまを描くために、たとえば《Il m'a dit:》や《J'ai pensé alors que》などと仮定できる伝達節を省いて、矢継ぎ早に夫のルボーのせりふとセヴリーヌ自身の当時の心中の思いを下線部のDDLとイタリックのDILで表現し分けたのだと考えられる。形式的に見るとDDともDIとも異なり、時制の変化をしていないという点では、ルボーのせりふはいわゆる「内的独白」(monologue intérieur)に近い。だが、一般的に一人称と現在形によって定義される内的独白という呼称は、ルボーのせりふにも、それに後続して半過去で表現されたセヴリーヌの心中の思いにも該当しない。したがってルボーのせりふに引用符がなければ、デュラスの例と何ら変わらない立派なDDLであろう——現代的な小説であれば、むしろこの引用符を省くほうが普通かも知れない。

なおDDLについては下記を参照: Michel Juillard, «Les Huns sont-ils entrés à cheval dans la bibliothèque? Ou les libertés du style indirect libre», *Cahiers Cosmos* 5 (2000), p. 71-90.

(6) ただしゾラの『獣人』の場合、「いまmaintenant」のような時の副詞は再現された話者の環境

に合わせられているが、場所については「そこlà」のように人称代名詞や時制と同じく隠れた話者の観点に置かれている場合が大部分である。指示詞が再現文の経験的な環境に直結しているかどうかについては作家によって異なるようだ。

(7) Ann Banfield, *op. cit.*, p.162. バンフィールドの著書の「話のない文章」(Phrases sans parole)というタイトルそのものが、こうした文学テキストの特殊性を強調している。

(8) *Ibid.*, p.171. ところでこのようなバンフィールドの主張に従うと、DILには半過去とその複合時制である大過去(および条件法の現在と過去)しか登場しないことになるが、話法転換の際DIにおける主節の動詞が現在形の時なら、従属節内の動詞は主節の動詞から影響を受けることはないという事態が生じる。そのためDIでは従属節は現在形のこともあるのだから、したがってDILにも半過去ではなく現在形や未来形の例が登場すると当然想定できる。下記が現在形に置かれたDILの例である。

[イタリック体がDIL]

Gregory réfléchit. *Comment distraire Dame Tortue? Elle adore regarder la télévision, mais toute la journée, comme le cheval, c'est trop. Que faire pour l'amuser?* [Brunhoff, Gregory et Dame Tortue]

グレゴリーは考えます。カメ子の気晴らしをどうするかな。テレビを見るのが好きと言ったって、あの馬みたいになんか一日中じゃあちょっとねえ。どうやって愉ませよう。[鷺見洋一(『翻訳仏文法』下、バベル・プレス、p.145)から引用]、

またバンフィールドの議論では、時制の半過去と並んで主語も三人称であることが大前提だが、後に見るように(p.10)実際には一人称のDIL(5)の例も存在する。

(9) *Ibid.*, p.166.

(10) *Ibid.*, p.240 et 249-250.

(11) *Ibid.*, p.314.

(12) *Ibid.*, p.297.

(13) *Ibid.*, p.314.

(14) 藤井貞和『物語理論講義』東京大学出版会、2004年、Ⅲ章 p.135以下。

(15) 鷺見洋一『翻訳仏文法』上・下、バベル・プレス、1985・1987、下巻 p.144。

(16) Robert J. Niess, 'Remarks on the Style indirect libre in L'Assommoir', *Nineteenth-Century Studies*, vol Ⅲ, nos 1 & 2, Fall-Winter 1974-75, p.134-135.

(17) *Ibid.*, p.125-126.

(18) たとえば下記を見よ: Marcel Vuillaume, 'La signalisation du style indirect libre', *Cahiers Chronos* 5, 2000, pp.107-130

(19) 下記を参照: 鷺見洋一、前掲書、p.142-152.

(20) Robert J. Niess, art. cit., p.128.

(21) *Ibid.*, p.133.

* 小論の作成にあたって、熊本大学の同僚市川雅己氏からは自由間接話法に関するフランス語学の文献についてご教示を得た。また「自由間接話法はだれが語っているのか?」という簡単な報告を自然主義文学研究会の2005年5月の例会(慶應義塾大)で行った際、臨席された会員諸氏からは多数の有益なご助言をいただいた。末筆ながらこれらの方々々に改めて感謝を申し述べたい。